

皆さん、ここでは「生活や経済としてのおかね」について書かれることが多いのだろうが、僕はおかね自体のことを書きたい。小中学生の頃、貨幣や紙幣の収集に熱中していた。

その発端は切手である。当時切手を物色しによく通ったスタンプ商（切手屋）は、だいたい古銭や紙幣も扱っていた。江戸以前の穴銭や金銀貨などのコレクションに励む人も多いが、僕の興味の対象は、ほんのちよつと昔の通貨。マニアの世界では俗に「現行コイン」と呼ばれていたが、穴ナシの五円黄銅貨とか、鳳凰百円銀貨とか、せいぜい戦後に発行されて、巷から姿を消し始めたような時期のもの。昭和三十五年の五十円ニッケル貨、昭和三十三年の五円黄銅貨……と、ヴィンテージ・ワインのようにレアな年号モノ（発行枚数が少ない）があつて、店でオツリをもらうたびに小銭を丹念に確かめていた。

お札で憧れていたのが、聖徳太子の千円札。当時千円札の絵柄は伊藤博文になっていたが、僕が小学校に上がる昭和三十八年頃まで聖徳太子が描かれていた。これは確か、ニセ札事件が頻発して、刷り換えられることになったのではなかったか？ シワクチャのやつを使った記憶はあるけれど、取っておこうと思いついた頃にはめつきりお目に掛かれなくなった。

板垣退助の百円札はストックブックに何枚



絵・江口修平

懐かしき昭和の「おかね」

泉 麻人

か保存されている。昭和二十八年暮れの発行というが、その後百円硬貨が流通するようになってからも、しばらく巷に出回っていた。とくに印象に残っているのは中学校時代の修学旅行で九州へ行ったとき。もう大阪万博の後の昭和四十六年のことだったが、ミヤゲ物を買うたびに百円札でオツリがくるのに驚いた。市場から消える寸前の百円札が、何かの事情で九州地方に集まっていた……なんて伝説を聞いたことがある。板垣は土佐の人だが、この一件以来、九州人のイメージが付いてしまった。

さて、もう一種、忘れられないのが高橋是清の五十円札だ。その存在を知っているのは五十代後半の僕の世代がぎりぎりかもしれない。発行は板垣百円より二年前の昭和二十六年というが、こちらは五十円硬貨の登場とともにあつという間に姿を消した、ただし、小学校の低学年の頃まで、駄菓子屋のオツリなんかでたま〜に出くわすことがあつた。

「この人、知ってる？ ダルマの大臣」
風貌からダルマのニッケルが付いた経済の神様、高橋是清の存在は、そんな駄菓子屋のオバチャンに教わったような気がする。裏面には高橋是清が建築を指揮した日本銀行本店が描かれた、ちよつとオレンジがかかった五十円札が懐かしい。

いずみ・あさと●1956年(昭和31)東京生まれ。慶應義塾大学卒業後、「週刊TVガイド」編集部などを経てフリーのコラムニストに。主な著書、『東京考現学図鑑』『東京ふつうの喫茶店』など。子供時代の切手収集のエピソードをつづった『昭和切手少年』（日本郵趣出版）が先頃刊行された。



撮影：山下 徹